第30回 総理大臣杯全日本大学サッカートーナメント 準々決勝

KOMAZAWA 1 (3PK4) 1 RITSUMEIKAN

駒澤大学 VS 立命館大学

試合終了後、悔しさに涙する選手達。左から菊地、伊藤、高崎　(撮影・斉藤卓也)

昨年の屈辱を晴らせず 今年も準々決勝で姿を消す

悔い残る敗戦

「結果が全てだったので、負けたのは…よくない」(**巻**)。

天を仰ぎ、ユニフォームで顔を覆い、その場に崩れ落ちた。「向こうも気持ちが入っていて厳しい試合だった」(**唐井**)。PK戦までもつれこんだ死闘を、駒大はモノにすることができなかった。

「もっと予測、もっと簡単に、サポート」、「切り替え」、「切らすな」。**唐井**、**筑城**らから絶えず檄が飛ぶ。「マークの受け渡しが最初からはっきりしていなかった」と**菊地**は悔やみ、**巻**は「球際で前半、相手に負けている場面が多かった」と振り返る。その言葉どおり、駒大は、前へ前へと人数をかけて攻め上がってくる立命大にうまく対応しきれずにいた。「相手の中盤は三枚いたのだが、そこがけっこう使われてしまった」(**榊原**)。決定的なパスをいとも簡単に前線へと通され、ドリブルで押し込まれる。次々とゴール前に迫ってくる左SB**武宮**やボランチ**永田**を捕まえきれていなかった。最終ラインで猛攻を跳ね返すギリギリの攻防が続いていた。

攻めても相手の2人がかりのプレスと動き出しの速さに手を焼く。**巻**の競り合いや**原**の突破などから決定機は作り出すもののこの日は両サイドハーフが不発。いつも見られる効果的なサイド攻撃は影を潜めた。

しかし74分に立命大・**西野**がこの日2枚目のイエローカードで退場。その6分後だった。待望の先制点。相手のミスから**巻**が奪ったボールは左サイドの**榊原**の元へ渡り、**榊原**はドリブルでペナルティエリア内に侵入。そして送ったボールは途中出場の**高崎**のゴールを生み出した。しかし、その6分後、終了間際の86分。右サイド、最終ラインの前にパスを出されドリブル突破を許し痛恨のファウル。PKを左下隅に沈められ、同点ゴールを献上してしまった。

延長戦は追加点奪取を狙い左サイドハーフに攻撃的な**島田**を投入。消耗しきった選手たちは懸命に走り回りチャンスを作るが、数的有利を活かすことが出来ずにタイムアップ。

そしてPK戦。3人目の**筑城**のキッ